

# 戦争

——国民はどう扱われてきたか——

## 中原澄子

あれは長い戦争だった。私のあたまの中には、飛び石のように埋もれてしまうことのない堅い記憶が点々と残っている。昭和二年の日華事変（当時は支那事変とよんだ）七月七日、七夕の日だから忘れない。大好きな叔父が上海戦に応召、半年も経ず、結核でひっそりと帰ってきた。小学二年生の時だ。大陸では戦勝続き、支那に四億の民があるくという歌まではやった。

昭和十五年（一九四〇年）、日本は神の国ということで起元二千六百年の大奉祝行事があった。大政翼賛会、大日本産業報国会もできた。昭和十六年二月八日の真珠湾攻撃は最も衝撃的だった。大陸では南京陥落、武漢三鎮、親日的な汪精衛政府樹立とのニュースが続いたので、これで戦争が終わる放送だとばかり思ったので、すっかり気落ちした。こんな気持ちを親にも言えない時勢だった。おかげで母はアタマが痛いと言ひと寝こんでしまい、父親も不機嫌になりものも言わない。炊事洗濯すべて私の仕事になった。小学六年生の時だ。やがて母はぼそっと、「世界には永世中立国というものもあるんよ」と呟いた。そんな別世界があることにおどろいた。胸の中で憧れたが、所詮夢のような話でしかなかった。戦争を好むのは政治家と財閥くらいだ。国民にはその一人一人に様々な生き方と、それに伴う思いがあった。長い戦争の終末に、

私より一歳年上の人から軍需工場へ大動員され、さらに歳の多い男女は、家庭の事情がどうであれ、国の必要とする部署に徴用されて行った。広島・長崎で爆死・被爆した人々にもそのような人達が数多くいた。

一九四五年七月二十六日ポツダム宣言発出から、同八月一四日日本政府が敗戦を認めるまでの一九日間、国民に見えなかつた国の中枢部の動き、そしてまたいつそう不可解な出来事、つまりポツダム宣言から一日目、八月六日の広島への原子爆弾投下、そのわずか三日後、長崎への原子爆弾投下、この一二日間の空白も、当時の国民にとつてはすべて闇の中であつた。せめて八月四日乃至五日にポツダム宣言受諾を世界に向けて発表していたら、と思うのだ。

以上二つの重なる闇の中に、私はあらためて首を突っ込んでみたいといろいろ考えてみた。特にアメリカが、広島への原子爆弾投下による惨劇をなぜ長崎でもみせつけたのかについて、歴史の裏側から覗いてみたいと考えた。以上はすでにわかりきったことかもしれないが、私は私なりに解明したいと考えた。

はじめに、何としても私自身の頭の整理をする必要から、第二次世界大戦の終末近くに行われた三つの「首脳会談」を記す。

一、一九四三年（昭和十八年）一月二三日〜二七日、エジプトでのカイロ会談——蒋介石総統（中）ルーズベルト大統領（米）、チャーチル首相（英）蒋介石夫人宋美齡も同行。日本に対する三国の無条件降伏要求。降伏後の日本の領土決定。朝鮮の独立など

について話し合われた。

二、一九四三年一月二日から二月一日にかけて、イランの首都でのテヘラン会談——スターリン首相・ルーズベルト大統領、チャーチル首相の三者。日、独、伊枢軸国に対する戦争遂行協力。三国の地中海作戦と北フランス上陸作戦との調整が議題（スターリンは、ドイツ降伏後対日参戦を約す）。

三、一九四五年、ウクライナ共和国黒海に面する保養地で行われたヤルタ会談、二月二日終了、チャーチル首相、ルーズベルト大統領、スターリン首相の三者。ドイツの敗北が決定的となったため、ドイツ降伏後のドイツ管理、国際連合の招集などについて（スターリンは、ドイツ降伏後三カ月以内に対日戦に参加することを条件に、南サハリン・千島列島のソ連への引渡し、中国の満州における主権回復などを挙げた）。※ソ連は一九四五年四月五日、日ソ中立条約不延長を日本に告げる。

四、ポツダム会談、ルーズベルト大統領・チャーチル首相・スターリン首相。一九四五年、七月一七日〜八月二日。ドイツベルリン南部で。ヨーロッパ第二次大戦の事後処理について協定を結ぶ。日本に対して七月二六日、アメリカ合衆国、イギリス、中華民国がポツダム共同宣言を発表。日本の降伏条件と戦後の対日処理方針（軍国主義的指導勢力の除去。戦争犯罪人の厳罰。連合国による占領。日本領土の極限。日本の徹底的な民主化などを規定したもの）。日本はポツダム宣言を黙殺した、原子爆弾の投下、ソ連参戦をみ

て八月一日ようやくポツダム宣言を受諾した。太平洋戦争終結。

日本は、ヨーロッパでのドイツ軍ポーランド侵攻によつて始まった世界大戦の翌年一九四〇年九月、日独伊三国同盟に調印した。中国大陸でようやく南京に日本の傀儡政府（精衛Ⅱ王兆銘）を樹立したが中国の政情複雑でさらに抗日勢力をソ連が援助する（飛行機など）に及んで日本軍は苦戦した。あの広大な大地に武器、兵糧、兵員を補充する泥沼の行軍を想像できる。行く先々で日本国の軍隊は、略奪をほしのままにすることから国軍、皇軍から蝗軍へと墮落していった。大陸で成果が挙がらないままに、軸足を南方に置きかえたのが、大東亜戦争の第二段階だった。第二次近衛内閣が、新体制運動と称し大政翼賛会を発足させた。紀元二千六百年（西暦一九四〇年）が、皇統の正しい暦であるとして、神武天皇即位の日とされる一月一日、宮城前広場に、海外からの招待客を含む約五万人を集め近衛首相が、天皇の治世が長く続くことを寿ぐ寿詞を奉読し、天皇より「大道ヲ中外ニ顕揚シテ人類ノ福祉ト万邦ノ協和ト寄与スルアラシクコトヲ期セヨ」と勅語が読み上げられたという。ラジオでの実況放送はあったようだが、天皇の肉声は流されなかった（思えば天皇の肉声を国民が耳にしたのは、終戦の詔勅が初めてであった）。ここから八紘一字なる語が創出された。以後日本国が神がかりをつよめ、国民が「赤子」とよばれ、戦場で草むす屍水漬く屍となり国内で飢えを耐えてみい、くさに身を捧げることになったのだ。

真珠湾奇襲攻撃の日、一九四一年一月二八日には、日本軍マラ

イ上陸（マラヤ連邦）タイに侵入、佛印と軍事協定締結。一〇日  
ルソン島、グアム島上陸、同年だけで、ボルネオ島、ミンダナオ  
島、ウエーク島上陸、香港占領。一九四二年（昭和一七）マニラ  
占領、セレベス島上陸、シンガポール占領。こう書き連ねるのが  
苦しくなってくる。南京虐殺にも劣らないマラヤでの日本軍の残  
忍な行為を想像したからだ。それは『チョプスイーシンガポール  
の日本兵たち』（訳・解説中原道子）という本にくわしい。チョ  
プスイとは、細かくきざんだ肉や野菜を炒め煮したアメリカ式中  
国料理のこと。日本軍の占領直後、すべての中国人は決められた  
地域に強制収容され、そのうち七万五千人が連れ去られ、彼等は  
反日的であるという疑惑を受けただけで殺された（肅清）。拷問  
「釜茹で」。軍用トラックが鋭く尖った鉄の棒を積んで疾走、ク  
アランプルールの最も混雑した通りで、通行人を次々に串刺しに  
した。マラヤ戦で、日本人の士官が降伏したイギリス人、オース  
トラリア人、インド人兵士七九人を斬首。売春宿の設営（教舎）。  
爪をはがす拷問。嬰兒殺し、嬰兒を投げ上げ落ちてくるところを  
銃剣で受けとめる。哀訴する親を突き刺す。泰緬鉄道建設の強制  
労働での二〇万人の死者へと話はつながっていく。

同年、チモール島、ジャワ島、ビルマ・ランゲーン占領、アン  
ダマン島上陸、バタン半島占領（四月一八日米陸上爆撃機、京浜名  
古屋、四日市、神戸を初空襲）、コレヒドール島占領、珊瑚海海戦、  
六月七日・八日、アリューシャン列島のキスカ・アッツ両島上陸、  
六月二七日、比島を南方軍から切離し大本営直轄とする。

この時点までに、日本軍は南太平洋のほとんど、広大な地域の  
大小島々に進出、濠洲のメルビル島まで爆撃した。八紘一宇とい

うのは帝国に乏しい資源、石油、ボーキサイト、穀物などの食品  
を調達することであった。他国の支配から解放するというのは盗  
賊の論理。

やがて食糧でさえ日本からの輸送は不可能となり、現地徴集あ  
るいは掠奪。そして餓死。

二月一〇日大本営重慶侵攻作戦中止。ガダルカナル島撤退決  
定。一九四三年（昭和一八）から撤退、あるいは全滅となる。五  
月二九日、アッツ島の日本軍二五七六名全滅。——「玉砕」とい  
う美しく神々しい比喩で賞賛された。

七月二九日、日本軍キスカ島撤退（九月八日イタリヤ無条件降  
伏）。以後、米軍、機動部隊の反攻によって退却、あるいは餓死、  
玉砕がつづく。特にマリアナ諸島のサイパン島、グアム島、テニ  
アン島の敗戦は、それからの戦局を逆転させる。このような情勢  
にもかかわらず政府は『最高戦争指導会議』なるものを設置（一九  
四四年八月五日）。一月六日、スターリンは革命記念日の演説で  
日本を侵略者と看做すとした。さらに一九四五年（昭和二〇年）  
ヤルタ・クリミア會談終了後の三月一七日、硫黄島守備隊全滅、  
四月一日米軍沖繩本島上陸は、日本にとつて決定的な敗北の兆で  
あった（沖繩戦は六月七日まで。島民は子どもから学生、老人まで日  
本軍と米軍相方に痛めつけられ、神国民民として傷つき、自死してい  
った）。（ドイツはこの年五月八日に無条件降伏）毎朝宮城遙拝を  
し、天皇・皇后両陛下の御真影を納めた奉安殿に最敬礼をし、頭  
を垂れて教育勅語奉読を拝聴する徹底した皇国思想は、原子爆弾  
で終末を迎えることになった。この毎朝の東方遙拝は、朝鮮でも  
南の占領地でも強要された。遡つて、一九一四年（大正三）第一

次世界大戦が始まったとき、八月二三日、日本はドイツに宣戦布告し、一〇月一四日日本海軍がサイパン島を占領、独領南洋諸島を占領した。翌年七月末、南洋占領地の首長二十二人が横浜に着き八月一日東京駅へ。駅の出口で新調の紋付羽織袴に着替えさせられ、翌日宮城前へ連れられて行く。案内人が「この奥に天皇陛下がおられる。これからお前たちを支配せらるるのだ」と説明し、「一同最敬礼」をさせたのだ。のち自動車に分乗して東京市内見物。日本の文明のすばらしさを見せつけたつもりだったろう。おそらく政商の発案だったろうが、他民族に対する優越感醜悪だ。皇統に繋がる皇国臣民という思想は、第二次世界大戦の終末、原子爆弾というかつてない恐ろしく惨い体験を強いられるまで続いたのだった。

以下、聖戦遂行のため政府が施行した法令と主な出来事・戦況などを記す。外国関係は（〜）で示す。

一九四一年（昭和一六）一月一六日国民徴用令改正。医療関係者徴用令公布実施。同二九日俘虜情報局設置。

一九四二年（昭和一七）一月二日毎月八日を大詔奉戴日と決定。

同月一六日翼賛壮年団創立。二〇日衣料点数切符制実施。大東亜圏決済通貨を圓とし決済中心を東京と発表。二月五日日本新聞協会設立、新聞事業令発動。一二日大日本愛国婦人会、大日本国防婦人会設立。二一日食糧管理法公布。二三日翼賛政治体制協議会発足。二五日重要事業場労働管理令公布。三月一日満州国建国十周年記念。一一日中小商工業再編成要綱決定。一一日鉄道技術研究所設定。二二日北部九州で初の防衛演習。四月一八日東京・名古屋・神戸・四日市に米機初空襲。五月八日朝鮮に昭和一九年度より徴兵制施行を閣議決定。二〇日翼賛政治会創立。三一日関門国道トンネル貫通。六月二五日食糧管理法施行規則公布。七月二二日戦時国防課週間開始。二四日全国新聞社の整理統合方針発表。八月一一日各省行政簡素化大綱（三割減員、勤務時間一時延長）決定。中学・高等学校・大学予科修業年限短縮決定。九月一日東郷茂徳外相東条内閣を去る。——大東亜省設置問題で東条首相と衝突——。九日国民練成要綱発表。二六日金鶏勳章条例改正公布。一〇月一日朝鮮青年特別練成令公布。六日満州国産業統制法実施。戦時陸運非常体制決定。一〇日陸軍兵器行政本部設置。一一日国鉄に二四時制実施。一三日全国百貨店売場を縮小し統制会等の事務所に提供するに決定。一四日重要物資強制買上断行。一五日演劇の上演許可制実施。一一月一日行政簡素化令公布実施。拓務省廃止、大東亜省開設。日本新聞配給会成立。一五日関門トンネル開通（鉄道）。二〇日文学報国会で愛国百人一首選定発表。二四日昭和一八年度も専門学校・大学の卒業時期を三乃至六カ月繰上げ決定。一二月四日英語を冠する雑誌名改題を決定。五日朝鮮における義務教育実施要綱発表。二二日思想研究所開所。二三日大日本言論報告会設立。

一九四三年（昭和一八）一月一日大阪毎日・東京日日を毎日新聞と改め統一。中野正剛の東条首相批判論文のため同日附朝日新聞発禁。一三日ジャズレコード禁止。人絹スワ生産指定工場決定。一六日煙草大巾値上げ。二〇日製鉄工場国家管理となる。一八日出版事業令公布施行。三月二日中学・高等女学校・実業学校規定公布。六日大日本言論報国会発会。二三日金属回収本部設置。五

月三日国民動員実施要綱閣議決定。一八日日本美術報国会結成。  
二一日戦時食糧自給対策決定。二八日勤労報国隊整備要綱公布。  
六月三日戦時衣生活簡素化実施要綱決定。一一日多摩陸軍技術研究所（電波兵器）設置を命令。工場就業時間制限廃止。学徒戦時動員体制確立要綱決定。七月二日博釜連絡航路開通。二六日朝鮮及び台湾に海軍志願施行令公布（八月一日実施）。三〇日女子学徒の動員決定。八月一〇日配給消費規則改正。九月八日イタリヤ無条件降伏。一二日理工科系以外の学徒徴兵猶予制撤廃。三〇日御前会議で絶対防衛線をマリアナ・カロリン、西ニューギニアに撤退すること、航空機増産に全力をあげることに、船舶対策を強化することを決定。南方在留日本人に徴兵制適用。一〇月八日東条内閣改造。十一月二二日、カイロ会談。二八日十一月一日、テヘラン会談。東条首相全世界に向けカイロ宣言及びテヘラン声明を放送により攻撃。一六日出版事業整理（残存一九五社）。二二日都市疎開実施要綱発表。二三日大学・高等専門学校整備要綱発表。二四日徴兵適齢一年繰下げ。三一日関門トンネル第二線開通。

一九四四年（昭和一九）一月六日木戸幸一内府終戦は降伏によるの外なきを悟る。一六日軍需会社第一次指定（二五〇社）。二四日戦時僧侶勤勞動員要綱発表。二九日官立高等商業学校一二校を工専・工経・経専校に転換決定。二月四日軍事教育全面強化方策発表。五日女学生戦時基準服制定。一〇日国民登録制拡大、男子一二六〇歳、女子四〇歳まで。一九日東条内閣改造。二一日東条陸相、嶋田海相現職のまま、それぞれ参謀総長・軍令部総長に就任。二二日人口調査、国民登録施行。二五日決戦非常措置要

綱決定。三月六日新聞夕刊廃止実施。一八日女子挺身隊強化方策発表。二二日琉球及び台湾の防備強化着手。二八日日本写真報国会創立。二九日中学校の勤勞動員大綱決定。四月一日旅行制限実施（特急・寝台・食堂車廃止）。一〇日天皇陸軍技術研究所に行幸。航空機増産激励。二五日第二次軍需会社指定、四二五社。五月四日国民総動員運動中央總會。二四日美術学校戦時態勢に改革。

六月六日女子挺身隊強制促進令。案要綱発表。七月三日小笠原・硫黄島方面急速防備強化輸送開始。四日大本营インパール作戦中止発令。米機部隊硫黄島・父島に來襲。六日本土防備強化のため九ヶ師団動員。七日サイパン守備隊全滅。八日在支米大型機北九州八幡方面空襲。インパール退却却始まる。一〇日総合雑誌「中央公論」「改造」等廃刊。陸軍予備役大将の有志東条、嶋田を批判。一三日木戸内府、東条首相に内閣補強条件を提示。一五日本土警備及び防空体制強化。一七日学童の集団疎開要綱発表。同嶋田海相辞職（軍令部総長専任）。後任海相野村直邦。米内大将入閣拒否。重臣ら東条内閣打倒談合決議を内府に報告。一八日東条内閣総辞職。梅津大将参謀総長となる。サイパン守備隊全滅を公表。二二日小磯、米内協力内閣成立。二三日米軍テニアン島上陸。二四日学徒勤勞動員の徹底強化。二九日在華米軍大連、鞍山、奉天空襲。八月一日比島方面防備の急速強化輸送開始。五日戦争指導会議設置。大本营政府情報交換会議新設。八日関門第二トンネル鉄道開通。九日第一回最高戦争指導会議開催、戦争指導大綱検討。一〇日グアム島守備軍全滅。一一日在支米軍山陰、九州、朝鮮來襲。一二日マリアナ方面より米大型機の活動開始。一五日国内警備体制強化方策要綱決定。一八日米潜水艦によりルソン島

海峡方面の船舶輸送大被害続出（連日）。一九日第六回最高戦争指導会議。二三日地方長官会議で米内海相戦況不利率直言明。父島にマリアナより敵機来襲。二五日連合軍パリに侵入。三一日台湾人に徴兵制度実施。九月七日日本政府インドネシア独立確約。北ビルマ、雲南国境騰越拉孟で日本軍潰滅。八日重光外相、駐日マリク大使にソ連へ特派使節派遣の件提議。スターマーより重光外相へ独ソ和平斡旋拒否。一六日モロトフ佐藤大使に日本より特派使節派遣提議拒否。二〇日ビルマ雲南国境方面日本軍全滅。二二日大日本戦時宗教報国会結成。大本營は決戦方面を比島とすることを下令。三〇日新国民運動中央本部創設、同実施要綱発表。

一〇月一日帝都防空本部発足。一〇日船員任命を国家管理とす。米機動部隊沖繩攻撃。一二日台湾沖航空戦。一四日B<sub>29</sub>台湾に来襲。満一八歳以上を兵役に編入。一九日神風特攻隊、敷島隊編成。二四日フイリピン沖会戦三日間に及ぶ。二五日神風特攻隊敷島隊出撃。二六日米軍レイテ飛行場を完全占領。二七日物資交換斡旋所要綱発表。二八日レイテに極力増援軍を派遣することとなる。十一月一日マリアナ基地のB<sub>29</sub>東京上空初偵察。五日米機動部隊ルソン島空襲、レイテ後方遮断作戦。B<sub>29</sub>関東偵察。六日B<sub>29</sub>呉軍港偵察。ルソン空襲続く。七日ソ連大使館の革命記念日祝賀会に日本高官多数出席（同日スターリン、日本を侵略国と看做すと演説）。八日ルーズベルト大統領四選。一〇日汪兆銘死亡。レイテ島への増援至難となる。一二日陸軍航空特攻方隊出撃。一四日スターリンの日本非難演説翼政会総務会で問題となる。一五日銀回収再実施発表。一六日ボルネオ方面B<sub>29</sub>の大空襲制空権米軍の手に帰す。一八日勤労報国協力令実施。一九日小磯内閣改造。

二一日B<sub>29</sub>九州西部に大挙来襲。二四日B<sub>29</sub>約八〇機東京初爆撃。二六日陸軍空挺部隊レイテ米軍飛行場突入。二七日B<sub>29</sub>関東、東海に来襲。二九日B<sub>29</sub>夜間東京来襲。一二月三日B<sub>29</sub>約七〇機東京空襲。七日奉天、大連にB<sub>29</sub>約七〇機来襲。八日米艦隊硫黄島砲撃。一八日B<sub>29</sub>約七〇機名古屋、大阪、神戸方面来襲。二二日B<sub>29</sub>約一〇〇機名古屋来襲。レイテ島の米軍飛行場全面的に活用を始める。二四日硫黄島を米艦隊砲撃。二六日米軍の放送によりレイテ島作戦終了判明。二七日B<sub>29</sub>約六〇機東京空襲。三〇日閩門国道トンネル貫通式。

一九四五年（昭和二〇）一月三日B<sub>29</sub>約九〇機大阪、名古屋、

浜松空襲。六日天皇内府に重臣招致を要望（戦局観聴取のため）。B<sub>29</sub>約七〇機九州西部空襲。九日B<sub>29</sub>約六〇機東京、名古屋に来襲。一二日学年疎開一年延長。米機動部隊南支那海に侵入し日本輸送船団を全滅す。一三日天皇内府に重臣招致を重ねて要望。一四日B<sub>29</sub>一〇〇機南台湾空襲。B<sub>29</sub>約六〇機名古屋、伊勢を空襲。一六日満州兵備改訂を令す（満州より内地へ、中国より満州へ兵力移動）。一八日最高戦争指導会議で戦争指導大綱決定（本土決戦即応態勢確立及び全軍特攻化等）。一九日約八〇機阪神空襲。二〇日大本營、本土決戦作戦大綱決定。二一日最後の決死の南方油内地輸入開始。二三日B<sub>29</sub>約七〇機名古屋空襲。二七日軍需会社充足令公布実施。B<sub>29</sub>七五機東京空襲。二月一日B<sub>29</sub>約一〇〇機シンガポール空襲。三日米軍マニラ市内に侵入。四日B<sub>29</sub>約九〇機神戸、松坂に来襲。二月四日、二月二日、ヤルタ会談。六日内地部隊全部作戦軍となる。七日平沼男天皇に戦局観言上。九日廣田弘毅天皇に戦局観言上。梅津参謀総長親ソ外交により米国と飽

迄抗戦の旨奏上。一〇日小磯内閣改造。一四日近衛公天皇に戦局観言上（早期終戦の要を申上ぐ）。一五日B<sub>29</sub>約六〇機名古屋空襲。一六日機動部隊、東海に来襲。硫黄島に艦砲射撃始まる。一九日若槻男及び牧野伯天皇に戦局観言上。米軍硫黄島に上陸。米大型機約一〇〇機東京空襲。二一日内閣改造（二二日佐藤大使モロトフにヤルタ会談の対日影響質問・モロトフ単に日ソ中立関係に言及）。二三日岡田大將天皇に戦局観言上。米軍マニラ旧市内に突入。米機動部隊再び関東に来襲。米大型機一三〇機東京空襲。二六日東条大將天皇に戦局観言上。三月四日米軍大型機一五〇機東京空襲。五日マニラの日本軍全滅。六日国民勤労動員令制定。八日木戸内府、重光外相と早期終戦を協議。九日佛印に対する武力処理開始。一〇日B<sub>29</sub>約一三〇機東京空襲、被害甚大（都市焼夷攻撃開始）。一二日B<sub>29</sub>約一三〇機名古屋来襲。一三日カンボジア王国独立宣言。地方新聞の一県一紙方針決定。一四日決戦教育措置（学校授業一カ年停止）。一五日大都市疎開強化要綱閣議決定。一六日小磯首相特旨<sup>4</sup>により大本営の議に列することとなる。一七日硫黄島守備軍全滅。B<sub>29</sub>約六〇機神戸空襲。一八日朝鮮人台湾人の政治処遇改革（選挙権賦与）。一八日米機動部隊九州南部、四国空襲。一九日日本軍ヒルマ・マンダレー撤退。米機動部隊阪神、呉空襲。B<sub>29</sub>名古屋空襲。二一日硫黄島飛行場を米軍使用開始。二三日米機動部隊南西諸島攻撃。沖繩艦砲射撃、数日連続。二五日米軍慶良間列島占領上陸泊地設定。B<sub>29</sub>約一三〇機名古屋空襲。二七日B<sub>29</sub>約五〇機関門海峡に機雷投下。二八日米機動部隊南九州攻撃。二九日沖繩周辺艦砲射撃始まる。三〇日大日本政治会結成。B<sub>29</sub>関門海峡に機雷投下。三一日B<sub>29</sub>約一七〇機九州各地来

襲。四月一日米軍沖繩本島上陸開始。阿波丸、米潜水艦に撃沈される（二〇〇三名死亡）。二日繆斌<sup>5</sup>問題につき天皇より小磯首相に下問（二六日最高戦争指導会議において繆斌問題に対し小磯首相難詰された）。二日B<sub>29</sub>約五〇機東京空襲。五日小磯内閣総辞職。四日関東・静岡に米大型機来襲。（**ソ連より日ソ中立条約の不延長を通告し来る**）。六日日本航空部隊沖繩方面米艦隊に攻撃開始。七日鈴木内閣成立。各府県に憲兵隊大增強。本土防衛のため第一、二総軍司令部及び航空総軍司令部設置。軍艦大和撃沈される。八日東郷茂徳氏、鈴木首相と終戦問答。大本営は本土決戦準備計画を策定。九日東郷茂徳外相就任。米空軍沖繩飛行場使用開始。一二月沖繩米軍に対し第二次航空大攻撃。（ルースベルト死去。トルーマン米大統領となる）。一三日B<sub>29</sub>約一七〇機東京空襲。一五日南九州飛行場地区に対する米空軍の来襲始まる。B<sub>29</sub>約二〇〇機京浜地区来襲。一六日沖繩に対する第三次航空大攻撃。一七日B<sub>29</sub>約七〇機南九州に来襲。一八日東郷外相<sup>スウェーデン</sup>典政府の和平仲介を打切る。B<sub>29</sub>約六〇機南九州に来襲。一九日鈴木首相特旨により大本営の議に列することとなる。沖繩における米軍地上攻撃本格的となる。二一日木戸内府東郷外相終戦問題談合。B<sub>29</sub>約二八〇機九州飛行場に来襲。二二日沖繩に対する第四次航空大攻撃。B<sub>29</sub>約七〇機南九州来襲。二三日大東亞諸国駐日大使の会議において世界秩序建設指導原理採択。二五日本本土作戦準備のため海軍総司令部設置。（国際連合憲章作成会議サンフランシスコにおいて開く）。（原子爆弾四カ月以内に完成の旨トルーマンに報告）二七日陸海軍報道部合同。（モロトフ佐藤大使にソ連は中立条約厳守を約束す）。二八日B<sub>29</sub>約一三〇機九州来襲。（ムツソリ

二反乱軍により死傷)。二九日日本軍沖繩に対し航空第五次大攻撃。B<sub>29</sub>約一〇〇機南九州來襲。三〇日濠洲軍ボルネオ上陸。大型機九州及び関東來襲。五月一日英空挺部隊ラングーンに降下。(二日ゲッペルス自殺。ペルリン陥落、独軍各地に降伏行動始める)。三日鈴木首相ドイツ崩壊に拘らず日本の継戦意図国民に発表。B<sub>29</sub>九州及び阪神來襲。四日B<sub>29</sub>九州各地來襲。五日中国から満州へ兵力転用。B<sub>29</sub>大挙中国、九州に來襲。瀬戸内海各航路に機雷投下始まる。(七日ドイツ無条件降伏(翌日発効)に調印)。八日硫黄島より米小型機関東來襲。(トルーマン大統領日本の軍民離間声明)。在スイス藤村海軍武官米國代表ダレスとの日米和平交渉につき請訓。九日ドイツの降伏に拘らず日本の戦争遂行決意不変を政府声明す。一〇日米大型機岩國、徳山に來襲。(瑞典政府による日米和平工作バツゲ氏より岡本公使に申入れ)。一一日六巨頭(最高戦争指導会議)極秘会談。ソ連に対する秘密外交討議。鈴木首相、東郷外相、米内海相、阿南陸相、梅津參謀總長、及川軍令部總長の六名。沖繩に対する第六次航空大攻撃。一二日六巨頭ソ連仲介の終戦方針を申合す。B<sub>29</sub>約四〇〇機名古屋來襲。一五日陸海軍報道部、内閣情報局内に統合。海運總監部設置、船舶の國家管理強化。対独諸条約失効声明。一七日米大型約一〇〇機名古屋來襲。米小型機京浜來襲。一八日運輸省設置(運輸通信省と通信院に分離)。一九日関東、静岡に米大型機約九〇機來襲。下関海峡米機雷のため殆ど恒久的に通峽不能となり始める。二二日戦時教育令公布。二四日沖繩飛行場に空挺隊を強行着陸(義烈空挺隊)。二四日沖繩に対する第七次航空大攻撃。B<sub>29</sub>約二五〇機東京空襲。二五日宮城空襲により炎上。B<sub>29</sub>約二五〇機東京空

襲、各所被害甚大。二七日沖繩に対する第八次航空大攻撃。二八日米軍はルソン島の戦闘終了を声明。南九州へ沖繩より小型機約七〇機來襲。二九日軍司令部總長更迭へ(及川大将より豊田大将へ)。米軍那覇市に突入。横浜大空襲(大小合せて六〇〇機)。三一日本米内海相阿南陸相の対立調整の為無任所三國務相と首陸海三相との六相懇談会。(宋子文重慶行政院長に就任)。六月一日東郷外相より佐藤駐ソ大使に日ソ友好強化交渉開始を訓令。B<sub>29</sub>約四〇〇機大阪空襲、被害甚大。(スティムソン、バーンズ等原子爆弾対日使用を進言)。二日沖繩に対する第九次航空大攻撃(不成功)。沖繩より小型機約一七〇機九州來襲。三日廣田弘毅氏、マリク大使と会談。沖繩に対する第一〇次航空大攻撃。沖繩より約一三〇機九州來襲。四日廣田より日ソ関係改善を申し入る。五日B<sub>29</sub>約三五〇機阪神に來襲。六日最高戦争指導会議において飽迄本土決戦断行の議案採択。七日沖繩に対する第一一次航空大攻撃。B<sub>29</sub>約二五〇機大阪來襲、被害甚大。八日御前会議において最高戦争指導会議の戦争指導大綱正式採択。木戸内府終戦試案起草。佐藤大使より外相へ日ソ友好強化絶望を進言。米艦上機約二〇〇機南九州來襲。九日第八七臨時議會開院式。九日木戸内府終戦試案を天皇に説明。(トルーマン大統領、宋子文に対しヤルタ秘密協定の履行はソ連の対日作戦参加上必要と力説)。B<sub>29</sub>約一三〇機尼崎、明石に來襲。一〇日地方總監府新設。佐藤駐ソ大使より日ソ関係改善困難の意見到着。米空軍約三七〇機関東來襲。一一日護國同志会所属議員の鈴木首相排撃運動(天佑天罰事件)。一二日沖繩守備軍よりの通信絶ゆ。一三日第八七臨時議會開院式。大政翼賛会等解散。米内海相、東郷外相終戦協議。木戸内府終戦案



を鈴木首相、米内海相に説明。一五日本戸内府終戦試案を東郷海相に説明、外相により御前會議決定との矛盾を指摘さる。B<sup>29</sup>約三〇〇機大阪來襲。(ヤルタ會談の秘密条項をハーレー米駐華大使、蔣介石に通報)。一八日本戸内府終戦試案を阿南陸相に説明。

六巨頭會談(ソ連仲介の和平着手の話出る)。鹿兒島、大牟田、浜松、四日市空襲を受く(中小都市焼夷攻撃本格開始)。(米国最高首脳部日本本土上陸作戰方針決定)。二〇日鈴木首相六巨頭會談成果を内府に報告。内府より天皇に六巨頭會議召集奏上。静岡、福岡、空襲。二一日木戸内府近衛公終戦策談合。沖繩守備隊全滅。

二二日戰時緊急措置法(内閣に独裁権限付与)公布。天皇より六巨頭に終戦措置推進方を御指示。吳軍港大空襲。二三日義勇兵役法(國民各組織の軍隊化)公布。茨城方面空襲。二四日廣田・マリク會談再開、マリクは日本側具體案要求。二五日本戸内府平沼首相、終戦問題談合。二六日名古屋に大型機三五〇機來襲。二八日米軍よりルソン島の戰鬪終了公表。二九日廣田よりマリクに日ソ關係改善具體案提出。門司、岡山、佐世保空襲。三〇日国内戰**場化具體措置閣議決定**。満州より雜穀強行積取り輸送作戰開始。

七月一日中国、九州、小都市空襲。二日東郷外相より高松宮にソ連に終戦斡旋依頼の方針説明。(ステイムソン長官対日案を大統領に提出。ポツダム宣言基礎案となる。但し天皇存続)。三日ソ連仲介和平促進につき首相を督促すべき旨内府より天皇に進言。主食配給一割減決定(一般七月二日、六六府県八月一日実施)。南九州各地空襲。四日徳島、高知、高松、姫路、関東各地空襲。五日文芸協議會発會式。関東、九州各地空襲。(外蒙首相、スターリンと會見)。(スパーツ大将、ジャイルス中将对日戰略爆撃空

軍(第八及び第二〇航空軍)の主、副指揮官に任命)。六日東郷外相平沼首相と終戦促進、日ソ交渉につき懇談。義勇隊管轄問題で閣議大論争。大本營は航空兵力を決戦時迄温存方針採用。関東、九州各地空襲。(ノルウエー対日宣戦)。七日鈴木首相天皇よりソ連仲介の和平交渉促進を督促さる。**内務省権限を大中に地方に委譲**。甲府、千葉、清水、明石、海南大型機空襲。八日東郷外相近衛公に和平依頼のため訪ソを依頼。小型機一五〇機関東來襲。

九日鈴木首相、東郷外相、近衛公をソ連特派につき打合せ。中部、東海、東北、京阪神各地空襲。一〇日六巨頭會議においてソ連に和平斡旋依頼のことを談合。米機動部隊関東空襲(本土攻撃作戰開始)。大型機阪神、九州來襲(B<sup>29</sup>約六〇〇機、岐阜、堺、和歌山、四日市、仙台)。一一日沖繩よりの九州に対する小型機攻撃殆ど毎日のこととなる。一二日天皇より近衛公に対し平和斡旋をソ連に交渉するためにソ連に使用するよう話。近衛使節派遣につき交渉するよう佐藤駐ソ大使に訓電。同日佐藤大使降伏終戦を外相に進言。

一三日米國、阿波丸撃沈事件の責任を認む。B<sup>29</sup>約三三〇機関東、東海來襲。(佐藤大使ソ連政府に近衛使節派遣を申入れる)。一四日六巨頭近衛使節派遣について談合(和平条件につき意見不一致)。米機動部隊東北、北海道を攻撃。(イタリア新政府対日宣戦布告。ポツダム會議出席のためスターリン、モロトフ、ドイツに出発)。釜石艦砲射撃、以後各地への砲撃始まる。一五日本米機動部隊、東北、北海道攻撃。青函連絡船に対する被害甚大(室蘭艦砲射撃)。一六日東海地区空襲。(ニューメキシコ州において**原子爆弾実験**)。一七日米機動部隊北関東攻撃。日立、久慈に艦砲射撃。平塚、沼津、桑名に大型機空襲。(ポツダムにて米、英、ソ三国巨頭會談

開く（直にソ連の対日参戦問題討議）。一八日米機動部隊南関東攻撃、房総半島に艦砲射撃。（ソ連政府近衛使節派遣拒否。ポツダム会議にてスターリン日本政府よりの和平斡旋依頼を打明く。ポツダム会議を正式にはベルリン会議と命名）。一九日B<sup>29</sup>東海、近畿、関東来襲。二〇日豊橋、岡崎へ小型機多数来襲。『在ソ佐藤尚武大使——七月二〇日一八時三〇分莫斯科発、七月二一日一四時三〇分東京着。東郷茂徳外務大臣宛最終終戦意見書』。二三日鉄道義勇隊編成下令。二四日米機動部隊浜松以西各地攻撃。B<sup>29</sup>名古屋、阪神、中国に来襲。二五日ソ連政府に近衛使節の使命を申入る。米機動部隊、中国、四国、九州攻撃。串本を艦砲攻撃。〈二六日米英華三国の対日声明（ポツダム宣言）発表。スターリン随員アントノフ將軍米随員に八月下旬参戦する旨言明〉。二七日ポツダム宣言受信、政府はポ宣言につき沈黙を守る旨決定。日本政治会南総裁。ポ宣言反駁。大牟田、松山、徳山にB<sup>29</sup>来襲。二八日鈴木首相、記者団に対しポツダム宣言黙殺、戦争邁進を表明。米機動部隊西日本攻撃。P<sup>51</sup>約二五〇機関東、約五〇〇機九州来襲。B<sup>29</sup>青森、焼津、宇和島、名古屋来襲。二九日新宮、艦砲射撃受く。（モロトフよりソ連の対日参戦は米英より要請の形にするようバーンズと相談）。三〇日米機動部隊、関東、東海、近畿攻撃。浜松附近艦砲射撃。P<sup>51</sup>約二五〇機近畿来襲。三一日清水港、苫小牧、艦砲射撃受く。八月一日スイス駐在加瀬公使よりポツダム宣言受諾を進言し来る。二日B<sup>29</sup>、鶴見、川崎、水戸、八王子、立川、長岡、富山を空襲（約八〇〇機、有史以来の大空襲）。三日内閣顧問会でポツダム宣言受諾の意見出る。米空軍、三月二七日以来のB<sup>29</sup>による機雷敷設で日本の港湾及び内海航路完全封

鎖を発表。四日佐藤大使よりポツダム宣言受諾を進言し来る。五日船舶義勇隊編成発令。（スターリン、モロトフ、ドイツより帰国）。六日月曜広島に原子爆弾投下。（トルーマン原子爆弾の威力等発表）。七日原子爆弾投下のトルーマン声明傍受。これを謀略宣伝とする主張あり。（佐藤大使、モロトフに会見申入れ。ローマ法王原子爆弾使用を非難。宋子文、モスコイ訪問、スターリンと会談）。八日広島に調査団派遣。東郷外相、天皇に原子爆弾に関し奏上。（モロトフより佐藤大使に對日宣戦文を手交）。佐藤大使の発電、日本に到着せず。天皇より外相を通じ首相に終戦の意を伝えられる。B<sup>29</sup>北九州（八幡）を爆撃。（米国国連憲章を批准）。九日ソ連の対日宣戦をラジオ放送により知る。六巨頭会議、閣議終戦を論議。ソ連軍対日戦闘行動開始。長崎に原子爆弾投下。（トルーマン、全米放送にて日本に即時降伏勧告。ダレス氏等日本に対する原子爆弾の連続使用見合せを進言）。米機動部隊奥羽攻撃。一〇日ポツダム宣言受諾に関する第一回聖断下る。国体護持条件附にてポツダム宣言受諾を連合国側に申し入る。マリク大使、ソ連の対日宣戦文伝達。米機動部隊奥羽及び関東空襲。（日本の降伏申入れ一八時四五分（華府時間）に米政府受領。（同盟放送受信はその一〇時間前）。一一日陸海軍の一部に終戦阻止運動起る。政府の国体護持声明と陸相の戦争邁進訓示、新聞に於て発表。（トルーマン、華府時間一〇時三〇分に連合国側回答を駐米スイス公使に渡す。フーヴァー元大統領、アジア及び欧州の赤化警告演説。一二日連合国回答ラジオにて到着。総師部両総長、連合側回答拒絶を天皇に進言。閣議連合側回答をめぐり論争。天皇、皇族を召し終戦意図を表明。陸軍将校の一部、陸

相に終戦阻止を進行。(日本側の回答を待ち米朝の大緊張。英国首相原子力の秘密厳守を米国に誓う)。一三日六巨頭閣議降伏問題大論争。B<sup>29</sup>日本の降伏交渉文の伝單を散布し始む。陸相、官邸でクーデター計画協議。米機動部隊関東来襲。(中共放送国民政府を痛烈非難)。一四日連合国回答受諾に關し第二回聖断下る。終戦詔勅換発。連合国側に回答受諾の旨申入れ。(中ソ友好同盟条約締結(米ソ間ヤルタ秘密協定の線による)。一四時(華府時間)日本降伏の旨同盟放送で判明。一八時一〇分(同前)正式回答スイス代理公使より米政府に手交。マッカーサー元帥連合軍最高指令官に任命)。B<sup>29</sup>約八〇〇機麻里布、大阪、熊谷、伊勢崎、秋田等大空襲。一五日陸軍将校の一部終戦阻止の叛乱。終戦詔勅玉音録音放送。鈴木内閣総辞職。阿南陸相自殺。米機動部隊関東来襲。(米国政府平時体制復帰計画発表。ガソリン等の統制即日解除。佛ベタン元帥に死刑宣告。蒋介石より毛沢東に国共会谈申入れ)。一六日マッカーサー元帥より即時停戦の指令到達。大西軍司令部次長自殺。ソ連極東司令官ワシレフスキー、日本軍に対し二〇日正午までに降伏を命ず。(インドネシア共和国建国宣言。グルー氏、國務次官辞任(アチソン代る)。宋子文首脳と会見のため華府着。瑞西駐在岡本陸軍少将自殺)。一七日東久邇宮内閣成立。陸海軍人に勅語(隱忍降伏の旨)。全軍に即時戦闘行動停止命令(本令全軍末端到達二日乃至二日を要する旨連合側に通告)。(ソ波新条約成立。ド・ゴール將軍、ベタン元帥を無期刑とす)。一八日東久邇宮首相、全軍將兵に承認必謹降伏を放送。同盟放送で全国民に進駐軍の軍紀厳正を通報。(佛国廣州灣租借を中国に返還)。(一九日チャンドラ・ボーズ氏台湾で死去)。降伏条項受

理のため河辺使節マニラ着。米空挺隊奉天でウエンライト將軍を救出。(越南帝國、バオダイ帝独立を宣言。ソ連新五カ年計画(一九四六一九五〇)実施を發表)。二四日軍人一部の降伏反対の不穩行動に關し東久邇宮首相ラジオで警告。滿州方面の戦闘状態概ね終る。(ソ連國際連合憲章批准)。二一日國民義勇隊解放。河辺使節降伏条項携帶帰京。中国における停戦正式交渉行わる。(米國武器貸与法廃止。中国軍隊北部佛印に進駐。北緯一六度以北の權利主張)。二二日最高戦争指導會議廃止。六政党復活。終戦伝達のため三殿下を外地軍に派遣。滿州國皇帝ソ連に抑留される。ソ連軍北千島進駐。(中國政府香港進駐權主張)。二三日終戦処理委員會設置。陸海軍復員開始。(スターリン対日戦の勝利宣言。英國政府香港に対する權利表明)。二四日日本政府マ元帥に厚木進駐延期懇請。(濠洲政府は対日処理に關し英本國と同等位置を主張)。二五日大東亞、軍需、農商の三省廃止。商工、農林兩省復活。連合軍の厚木進駐二日繰下げに決定。ソ連軍朝鮮東岸に新上陸。(中國政府香港に対する主張讓歩)。二六日終戦連絡事務局設置。(中共軍に先だち國府軍上海、南京入城)。二七日中部太平洋及び北部ルソンの日本軍降伏。米艦隊相模灣入泊。(駐華米大使ハーレー延安に飛び毛沢東と会見)。二八日全國農業会結成。日本文学報国会解散。連合軍先発隊厚木飛行場到着。米艦隊東京灣入港。(毛沢東中共主席重慶に飛び蒋介石と会見)。二九日英艦香港、ソ艦隊旅順入港。(米大統領眞珠灣事件報告公表。ドイツ戦犯ゲーリング、ヘス、リップントロップ以下二四名起訴。三〇日日本に抑留中の連合軍捕虜引揚げ。マッカーサー元帥厚木進駐。(米國軍需工場四八時間労働制を四〇時間制に復帰)。三一日

在郷軍人会、大日本興亜会等解散。マ元帥総司令部を横浜ニユー  
グランドホテルに設置。九月一日山陽、九州地方大風水害。内閣  
調査局設置。綜合計画局、防空総本部廃止。米軍第八軍横浜上陸  
開始。ソ連軍千島占領完了。(米国防陸軍食糧民間放出。米大統領  
九月二日をV-J Day 宣言)。二日ミズリー艦上で降伏文書に  
調印。言論報国会解散。(米国防陸軍戦時通信機関終止)。

以上『終戦戦史録』外務大臣官房文書課長三宅喜二郎、昭和二六  
年一月刊。一九四二年、一九四三年は省略したが一九四五年は全  
項転載した。

大田昌秀氏は著書『これが沖繩戦だ』の解説で「沖繩戦におけ  
る十数万におよぶ住民の犠牲は、畢竟、それ相応には報いられな  
かった。その点私は、もし本土決戦が行われたら、いかなる事態  
を生ぜしめたかということ、日本国民が真に、わが事」とし  
て感得し得たときにはじめて沖繩戦のもつ意味の重さを理解しう  
るのではないかと、思わざるを得ない」と記している。沖繩は一  
九四四年一〇月九日から一九四五年八月四日まで、長期にわたる  
迫撃戦下におかれた。八月六日の前々日までである。「日本国民  
が真にわが事」として感得する、重い言葉である。人間とし  
ての優しき、想像力、創造力、さらに賢明な判断力が問われてい  
る。

ポツダム宣言は、すでに七月二六日日本政府に発出されている。  
沖繩では六月三〇日、南部における米軍の掃討作戦を完了。八月  
四日沖繩北部における掃討作戦を終了したのだ。

続けて廣島、長崎の原爆被爆である。太田氏の言う「真にわが  
事」として感得する知識も感性も薄らいでいたのだ。それは天皇  
を神とし国民を赤子とする、選ばれた民族という幻想に由来して  
いた。その最たるものが徴兵制度と軍隊という徹底したヒエラル  
キーの世界だったといえよう。八紘一宇という土俗信仰に根ざし  
た精神構造からは、科学的理論的な思考力も判断力も生まれては  
こなかった。心身共に神国に捧げる特別攻撃隊を案出する発想も  
ここに根ざしている。その戦死者数、海軍二五二三名、回天・震  
洋・海艦・特殊潜航艇一六二五名。陸軍で、沖繩への義烈空挺隊  
一四一名。比島などへの海上挺身隊二六三名。合計一六七四名。  
海軍・陸軍の戦死者数の総計は五八二二名に上る。特別攻撃隊の  
死者数である。これをまた「散華」という比喩で飾った。

佐藤尚武の終戦意見文の一通に「花の如き若者が戦火に散つて  
いくのに忍びない」という一文があったが、これが人間の正常  
な精神構造なのだ。

上位・下位という組織の中にはいろいろな兵に「輜重輪卒」(陸  
軍)があつた。輜は衣類をのせる車。重は荷をのせる車。丙種合  
格者のことを指したと思う。徴兵検査の結果、国民兵役に適する  
が現役に適さないとされた者。当時「輜重輪卒が兵隊ならばちよ  
うちよとんぼは鳥のうち」と嘲けられながら牛に兵糧弾薬を運ぶ  
重要なポストにあつた兵である。このような上下意識を婦女子の  
世界につくつたのが、「国防婦人会」である。この中にも指導に  
当たる女性があつて軍隊の上官の役を果たした。隣組組織もそう  
である。非国民とよばれないように、組長の指示に従つた。

ここまで書いてきて、私の初めの疑問は解けなかった。けれど

逆になぜ早急にポツダム宣言を受諾しなかったのかという大日本帝国上層部の動きは見えてきた。

一九四五年に入つて六月天皇は木戸孝一内府に、戦局観を聴取するために重臣招致を要望した。米軍の空襲は日々激しくなる。

一三日天皇は再び内府に重臣招致を要望した。重臣は多忙なのである。一八日には同会議で、「本土決戦即応態勢確立」「全軍特攻

化」を決定した。ヤルタ会談が始まつている二月七日平沼騏一郎

男爵が戦局観言上。一九日廣田弘毅戦局観言上。梅津參謀総長親ソ外交により飽迄抗戦の旨奏上。一四日近衛文麿公爵戦局観言上。

一九日若槻男爵戦局観言上。同日牧野伸顕伯爵戦局観言上。二三

日岡田啓介海軍大将戦局観言上。二六日東条英機陸軍大将戦局観言上。二月七日から二六日まで、間をおいてうやうやしく参内す

る。どの重臣が何を奏上したのか、近衛公が急ぎ終戦へ転換すべきことを語つたこと、梅津參謀総長が日ソ中立条約不延長（一九

四一年四月締結、有効期間五年）のソ連の意図を推測することもなく、アメリカと抗戦することを奏上した。その他重臣がどのような戦局の判断を示したのかはわからない。そのあいだも日夜日本の

国土、国民は空襲と空腹、動員、徴用で喘いでいる。重臣それぞれ

の思惑のちがいと対立はあるだろうが逼迫した世界情勢について客観的な視点を持つていない点で共通していたのではない

か。宮中に参内することの恐れ多い行為、硬直した姿勢からは開かれた自由な発言は想像し難い。ひとり五撰家筆頭の近衛文麿は

天皇に近しく考えを述べたと思われる。身分のちがいによつて天皇とのかわり方を決める因襲が、天皇の神性を一段と強める方

向へと作用してきたと思われる。因襲の最たるものが「内府」の

存在ではなかったか。天皇を神たらしめ、日本国を神の国として一般国民を徹底した皇国臣民に仕立て上げた元凶のひとつが内府制度ではなかったかと私は思う。天皇は全軍の統帥者でありながら、外界を見る目を持たなかった。幕の内において内府の申し上げることを通して日常を垣間見る、これで統帥の務めが果たされたろうか。

早くにサイパン、グアムは全滅、マリアナ諸島は米軍の日本攻略の基地の機能を持つに到っている。サイパンの南にはテニアン島がある（米軍はこの島から原爆搭載機を発進した）。硫黄島はさらに日本列島に近い。沖縄に近い。

木戸内府は三月八日、重光外相とようやく終戦協議を行なつたが、ネットになるものがあつたのだろう、天皇制という。私はこの時点で、硫黄島、サイパン、グアム（テニアン）を米軍が自由に基地化した時点で、どうして終戦交渉を始めなかつたのかと思う。どこまで負け続けても「国体」の方へ、うちむきにしか思考できなかつたのだろう。食べ物ひとつとっても私共はとにかくひもじかつたのだ。

一九四四年（昭和一九）九月ごろから重光葵外相は、ソ連在日大使マリクを訪問、在口佐藤大使の在任が長きにわたるため、事務打合せのため一時帰国させることも考えたが、むしろ国内事情に精通する地位高き人物を特派使節の顧問格としてモスクワに派遣させ日本側の意向を蘇側に徹底させた旨を申し入れた。マリクは、人選は具体的に進んでいるのかと質し、重光が目下相談中であると答える。マリクは申入れの次第を本国政府に伝達しよう

と答えた。ちよつどそのころ、東部戦線ではソ連軍、東プロシア周辺ワルソー東方と、東北方にドイツ軍主力を引付け、虚に乗じてルーマニアに侵入大成果を収めた。一部部隊は七日ユーゴとの国境ダニューブを渡河し、同国のチトー軍との連絡をつける態勢にあつた。ソ佐藤大使は、モスクワの新聞にみるロンドン電及びBBCにより欧州戦況を知る。「ブルガリア」を自己に従順なる国となし得た場合はユーゴと連繫し、ソ連の勢力とみに増大、米英の危惧するところとなろうが、米英両国は第二戦線との関係上ソ連との提携を固くする必要に迫られており、ソ連のバルカン進出も当分容認するほかないであろう。佐藤の見るところ、確實な事はナチス打倒については三国の結束極めて固い現実の事態にある。「しばしば上申の通り、この結束に対し楔を打込むこと到底困難なり」なお「英米と共にナチス打倒政策を固持する蘇連としては、日本打倒を主張する英米に対し、その主張を齟えせしめ若くは之を緩和させる如き態度をとることあり得べからざること亦理の当然なり。即ち大東亜戦に関し蘇連に多くを望み得ざることとなる次第、近衛特使団派遣は当分考量してもらいたい」概略このように打電した。

佐藤・モロトフ会談は第二次ケベック会談(米・英)が終了した一六日午後七時から行なわれ、佐藤は特使派遣の件を申し入れた。モロトフは答えた。「重光外相よりマリツクに話された次第は疾く電承しおれり。唯問題の特使派遣の意義に付ては充分インフォームされ居らず。亦外相より詳細の説明なかりし為明かならず。右使節は如何なる問題に付派遣せらるるものなりや」と質す。佐藤大使は「(前略)日蘇関係幸い友好なるも、意見交換の形に

て話し合いを為す有利とすべき問題多々あり。欧州及極東に展開しつつある大戦の結果種々重要問題ある訳にて(中略)本使は既に二年半に亘り本国を離れ居るが故、この際日本内部の事情に精通せる人來りて貴委員と意見交換すること有意義なりと外相に於て考え居らるる次第。又本使個人としても此の案に賛意を表するものにして我国より重要人物の派遣を希望し居れり」と述べた。

これに対してモロトフは概略次のように答へ日本側の申入れを退けた。(一)特使派遣の新聞問題なく(二)両国関係諸問題は従来の外交経路にて処理しうること(三)特使派遣は国内及び諸外国に種々論議され、誤解を生ずる恐れがあると不同意を表明した。

佐藤大使は、近頃種々噂するところによれば米国は重慶・中共間の接近を希望し、策動しているようであり、またソ連内でも中共に対する重慶の態度に種々批判を加えるものがある。もし重慶と中共とが合同して単一戦線を設けることとなれば、日本に対する抵抗を増大させる結果となる。それがソ連の態度に懸念を生ずる訳であり、ソ連の中立態度に一種奇態な事態を招来することとなると述べた。これに対しモロトフは中国問題に干渉することを欲しない。最近の重慶に対するソ連の關係に何等変化なく従前通りであると述べ、ソ連の中共支援については一言も発しなかつた。佐藤は中共支援問題について直接質問しモロトフを窮地に追い込むことを避け、ただソ連の力添へにより国共合体し単一戦線を形成することにでもなれば、中立と称しながら間接的に日本に対する抵抗力を増強するという矛盾を来すことになる」と述べるに止めた(九月一七日佐藤発重光宛第一九一一号、緊急、館長符号)。

近衛氏派遣については天皇からも強い希望があつたようだが政

府内でソ連に提示する案件が遂にまとまらず、氏は内心腹芸で当たらうとまで考えたが話は停滞したままだ。近衛文麿は日中全面戦争期の首相であったことは冒頭に触れた。一九四一年第三次組閣をしたが、東条陸相の対米主戦論に敗れて辞職している。

私はつい最近まで昭和二〇年八月のきわどい時期に近衛文麿をソ連に派遣しようとして実現しなかったことと、佐藤という人がその時大使であったことを、ひとりソ連にいてどれほど責任感に苛まれただろう、と思つていた。しかし、モスクワに在つて東西の情勢を熟知し、外交官としてモロトフとの柔軟でそのうえ化かし合ひのような応対に耐えうる見事な外交官であつたことがようやく理解できた。

昭和二〇年に入り、東郷外務大臣からも佐藤大使に向け、近衛派遣の件が「陛下の御趣旨を奉じ派遣される近衛特派使節の使命は戦争終結の為ソ連政府の盡力斡旋を同政府に依頼し右に対する具体的意図を政府に開陳せんとするものにして同時に戦時及び戦後に亘り帝国外交の基調たるべき日「ソ」関係の強化増進に関する事項に付商議せんとするに在る」旨を申入れ、「天皇陛下が特に本件使節を派遣せらるるは、偏に彼我交戦による之以上の流血を差止めんとする御希望に出でたるものにして（中略）ソ連の考慮を煩わさんとするものなることを附言せる上、本件に対するソ連政府の好意的考慮を求めらるる次第」と打電してきた。

ゾロフスキー代理は、この申出は重要な事件だから書物で頂きたいとまず述べ、(一) 日本政府は米英との戦争終結の為ソ連政府の斡旋を求むると了解する。(二) 右に付近衛公爵が何等かの具体的提議をもたらずものと了解する。更に具体的提議とは、戦

争終結に関するものなるか、或は「ソ」日関係増進に関するものなりやに付説明を得たいと述べる。佐藤大使は、申し入れを書物で差出すことは訓令を逸脱することになるが、貴代理の言の通り、「ソ」連首脳部が目下伯林<sup>ベルリン</sup>に在るに鑑み本使のみの取計として後刻書物を送付すると述べ、後陳述内容を書物として送付した。

右書物は真に極秘とせられたきこと、近衛公が宮中の御信任厚く、本邦政界に於て卓越せる地位を占める人物で、その使命は広汎に亘るべくソ連政府に斡旋を依頼すると同時に、この斡旋を容易ならしむる為、日ソ間の問題について意見交換を行ひ、両国将来の關係に迄立入り話さるべしと附言した。ゾロフスキー代理は、問題の機微なる点及び貴使申出が極秘のものなる點良く了解せりと答え、書物接受次第、直ちに政府に報告し、又政府より何らかの指示あらば即刻通知すべしと述べた。

このようにして近衛派遣問題はソ連の利害がらみで延々と決着を見なかつた。それでもなお東郷外相からの佐藤大使宛の訓電は続けられる。一九四五年（昭和二〇）七月一日、スターリン、モロトフは伯林に向かつている。佐藤大使は返電で、ソ連が回答に躊躇する理由として(一) 特使の使命が戦争終結の具体案を示すのか否か不明であること。(二) 日本側が無条件降伏もしくはこれに近い講和を提議するのなら格別だが、「ネゴシエイテッド・ピース」を考え、ソ連の仲介斡旋を望んでくるのならソ連としては到底受入れ難いこと。(三) 米、英、ソ三国強調が必要な時期に、日本のために三国間に水を差されることは避くべしとすること。(四) 来るべき三巨頭会議では極東問題も必然会議内外の話題に上がるべく特使問題につき、英米の動向を見届ける要あり、

ソ連だけでは態度決定し難いと考えていること等を示した。さらに特使差遣に決する場合、戦争終結の具体提案をもちたらずことに廟議御決定を切望する次第なりと念を押しした。

東郷外相からは、七月一七日、(一)、我が方の戦力は今なほ敵に相当の打撃を与え得ることは総統部のみならず政府に於ても確信し居る所なるが反覆来襲に対しては万全ではない。しかし戦力維持せられる今日英米が日本の名誉と存在を認むるならば、戦争終結せしめ、戦争の惨禍より人類を救ひ度きも、飽く迄無条件降伏を固執するならば帝国は一丸となり徹底的に抗戦する決心なるは畏くも上御一人も御決意せられおる次第なればソ連に依頼して無条件降伏に等しい斡旋を求めんとするものに非ず。この点特に御承知置相成度(二)特使派遣のソ連回答はなるべく速かに同意を取付けること極めて肝要につき「ロゾフスキー」を通じ極力御努力あり度(七月一七日からポツダム会談は始まった)。一八日夜口ゾフスキーから佐藤大使宛、日本皇帝のメッセージには何等具体的提議を包含し居らず。特使派遣の使命が何かも不明瞭なればソビエト政府はいずれにも確たる回答すること不可能なりと丁寧にことわられた。佐藤氏は東郷宛、当国政府には具体案を以て臨む外ない事又証せられたこと、当方面の雰囲気とは甚だしくかけ離れていること故、貴見の如き希望でも当国を動かすこと不可なること、特使拒否の態度によつても推察される由返電。

外相にして、この通りである。天皇と近衛とにしか目が向いていない。佐藤氏はよくこの対応に心を砕いたものだ。

佐藤大使は東郷に終戦意見電報を打ち続ける。六月八日にも打電、七月一二日にも打電。その核心は日ソ中立条約(一九四一年

四月締結、有効期限五年)を一九四五年四月五日廃棄通告し来たのは米英との良好な関係を保ちつつ日ソ関係に深入りすることを避けるねらいがあること、露国にはポーツマス条約を露国史上の屈辱と感じ居る心理状態も見通してはならないこと。近き将来、我方唯一の後方補給地域満州さへも敵機の跳梁に委ねることになれば、我方抗戦力維持上最後の望みを絶たれる破目となるべきこと。萬一ソ連が弱みにつけこみ俄然態度を豹変、我に武力干渉の決意を示すに至る場合、最早如何とも為し難く、大捷を博した後底彼の敵にあらず。帝国の前途救ふ由なし。我が方総ての犠牲を忍び、国体擁護の一途に出づる外なし。一二日電には「貴電第八九一号の説明振りは机上の美句と申す外なし。日本本土さへ危殆に陥りたる現状において、日本は最早全東亜の平和維持責任者の地位に在らざり。今日帝国に抗戦の余力ありや。幾十万の壮丁幾百万の無辜の都市住民を犠牲にして猶抗戦の意義ありや。ソ連当局には抽象論にては彼らを動かすこと難し、内容空虚、事実に遠ざかりたる美句を連ねて彼らを説得すること到底難し。貴電第八五三号案に対しモロトフ殆ど何等興味を感じおらず。現実に遠ざかりたる幻想を防止すること本使第一の責任と信じ以上申進する次第御了承を仰ぐ」(以上要約)。

七月二〇日発七月二一日東京着(最終終戦意見文)

東郷外務大臣

在ソ佐藤大使

第一四二七号(緊急、館長符号)(極秘)

貴電第九一三号に關し、慎重考量の結果左に本使の腹藏なき意見



申進す。

一、米機動部隊は七月一四日以来本洲北部海面に行動を開始し釜石室蘭水戸方に接岸し艦砲射撃を加へその艦載機は本土北海道間の連絡を妨害し多数の船舶を撃沈したりと伝へられこれに対する我方邀撃は敵側報道によれば海空軍とも皆無に近しとのことにて右は遺憾ながら我方抗戦力の低下を如実に物語るものと考へられ此の趨勢をもつてすれば敵艦隊の行動は日を逐ふて傍若無人となるべく現に今回来襲機動部隊の構成艦名並びに司令官の姓名名で麗々と放送し公然日本海軍に挑戦し居れり。

二、他方マリアナ沖繩及び硫黄島方面基地よりする敵空軍の來襲も殆ど連日。日本各地及び大都市は既に廢墟と化し軍需生産施設貯油所等の外中小都市まで爆撃の手伸び来り逐次炎上壊滅を見つつあり而してこれに対する我方防空措置もB二九來襲初期ごろに比し低下の迹歴然たるものあるが如く制空権も又、敵の手に委し去りたるものと判然せざるを得ず。

三、一度制空権を敵の手に奪はれたる後の我方戦力は加速度をもつて降下すること独逸の例に徴するも明かなり。而して一旦敵手に委したる場合制空権を取戻すは外部よりの援助なくしてはほとんど困難にして帝国としては満州内の航空機大量生産を望む外救いの手なき次第なるもこれとて発達日なほ浅き満州産業にいく何の期待を懸け得べきや確信を有し難きのみならずその満州国すら近く沖繩よりする大爆撃の好餌たらんとしつつあり。

四、本使は素より敵の本土上陸のことありや否やを知らずといへども亦そのことなかるべきを断言する丈の確信も持ち合はさず敵のレイテ比島上陸作戦の徹底ぶりをもつてすれば地理的条件

の相違はあるも寧ろ上陸を覚悟するを要すべきを信ず而して敵上陸決行の日ありとせばその我交戦力を徹底的に壊滅せしめたる後のことたるべきこと又明かなり。

我が交戦力打倒の爲には敵は直接軍事施設生産設備の破壊都市爆撃等の外国民生活力の剥奪に力を注ぐべし。敵は我国の食糧難を充分探知し居るべく今秋の收穫が我が戦力に如何に大なる關係を有するやに付熟知し居るべければ收穫時に際し收穫物の破壊を試むること絶無なるを期せず例えば全国に亘り稔りたる稲田の乾燥期を見極め一挙にこれを焼却する如き方法を案出すること敵側にとりては不可能事にあらざるべく又彼等としては当然着け込むべき我方の弱点とすべし。

今秋の收穫を失はば我は絶対的危機に瀕し立<sup>たてしう</sup>所に戦争継続不能に陥るべし既に制空権を奪はれたる帝国は右の事態に對し何等手の施すべきものもなく敵の爲すがままに委せざるを得ざるべし。

五、本使は交戦力壊滅して猶戦争を継続するをもつて不可能事となすものなること既に往電第一一四三号にても申進したる所なり然るに皇軍は更なり全国民もまた至上命令なき限り敵の軍門に降るを肯ぜざるべく文字通り最後の一人となるまで矛を捨てざるべしさりながら敵の絶対優勢なる爆撃砲火の下既に交戦力を失ひたる將兵及び国民が全部戦死を遂げたりとも爲に社稷<sup>注</sup>は救はるべくもあらず七千万の民草枯れて上御一人安泰なるを得べきや想ふに此処に到れば個人の立場も軍の名譽も將<sup>はたまた</sup>又国民としての自負心も社稷には代へ難し即ち我は早きに及んで講和提唱の決意を固むる他なしと言ふに帰着す。

六、講和提唱は貴電第八九三号の特派使節により莫斯科<sup>モスクワ</sup>において為さるるを最も至当とすると本使は考へ居たり然るに特使差遣は不幸ソ側の拒否に會ひ（往電一四一七号）たるにより何等他の案出の要に迫れり。

而して一旦講和に決すればその結果日本国民は過酷の条件甘受のこととなるは避け難き所なるもその覚悟をもって出来る限り短期間内に彼我軍代表者により停戦協定を了し此の上の犠牲を取止むべし。

一方講和提議に當り我方の留保且力説を要するは国体擁護の件にして右は我方絶対の要求として相手方に強く印象を与ふるを要すべきは往電第一四一六号にて申進したる所なり。本問題に付ては国体保持の問題は国内問題なりとして講和条件より除外することもあるひは一方法とすべきか但しその場合には勢ひ国内において憲法會議の如きものを召集し形式的にも民衆の声を聴く体裁となすを要すべく而して本會議には極左党の如き国体保持に公然反対を唱ふるもの皆無なるを期し難く又憲法會議召集夫れ自身憲法に抵触することとなるべきも非常事態に対処せんとするものなれば違憲の非難に対しては何等か適當なる解決を与ふるを要すべし。

他方此の形式の下に国体問題を解決することとせばあるひは案外敵側の同意を得ること容易となるやも計り難し而して国民の総意をもって皇室推戴を決議せば我国体は世界的にも却て重きを加ふるものとなるべし。

七、本使の言はんとする講和提唱は国体擁護以外の敵側条件を大抵の所まで容認せんとするを意味するものにして国体保持さへ

成れば国家の名譽と存立は最小限保障さるる訳にて貴電第九一三号の二の御趣旨に悖らざるべきを信ず（往電第一四一六号参照）。

八、今や帝國は正に文字通り興亡の岐路に立てり。このまま交戦を続行せんか國民は尽忠報國の誠を蓋し安じて瞑すべきも国そのものは滅亡にひんすべし。最後まで大東亜戦の大義名分に忠実なるは可なるも社稷を滅ぼしてなお名分を明らかにせんとするは無意味にして、国家の存立はあらゆる犠牲を忍びてもこれを護持せざるべからず。

満州事変以来日本は權道を踏み來り大東亜戦に至りて遂に自己の力以上の大戦に突入せり。その結果今や本洲さへ蹂躪せられんとする危険に直面し最早や確たる成算なきに到れる以上早きに及んで決意し干戈を収めて国家と國民とを救ふこと為政治家の責務なるを信ず。もち論我に和議を求むる以上講和条件の如何なるものなりやは独逸の例より見て略々察知せらるる所にして國民は長期に亘り敵國の重圧に喘がざるを得ず。然しながら國家の命脈はこれによりて継がるべく斯くして数十年の後再び以前の繁栄を回復するを得べけん。政府は正に此の道を選ぶべく斯くして一日も早く聖上御軫念を安じ奉らんことを切願して已まず。

戦争終結の暁には国内各方面に徹底した改革を施し一般政治を民衆化し官僚の跋扈独善を排す。國際關係に無とんちやくなりしことがすなわち今日の災いを招きたる原因なり。かつまた戦後の日本は常時國際關係の風波にもまれながら活路<sup>レバ</sup>を見いだす困難に遭遇すべきに想到し、将来外政に重点をおく底<sup>ソコ</sup>の最善の政治組織を採用するを緊要とすと認む。

防共協定以来のわが対外政策は完全に破綻せり。ナチズムにく

みして世界を枢軸、半枢軸の二勢力に分かちたることがそもそも  
の起りにして、この過誤は将来にたいし明確に認識し外交政策  
の根本的立て直しをなすを必要とすべし。

(九、全文約四〇行省略) 註※ 社稷(土地の神、五穀の神) 國家

右佐藤尚武大使の最後の終戦意見文は、ポツダム会談開始の七  
月一七日の三日後七月二〇日に書かれた(ポツダム会談一日目の  
前日、七月一六日、原子爆弾実験成功、直ちにトルーマンにとどく)。

勿論佐藤大使が原子爆弾成功を知っていたかどうか、私にはわ  
からない。がソ連と日本との間に長いあいだの確執が潜んでいる  
こと、欧州情勢の見通しが立ちつつあることから、日本はこれか  
らいつそう苦境に立つことなど広い視界に立つて、近衛使節の件  
より、一刻も早く終戦宣言を発することを進言した。政府の一部  
には、「佐藤は論ずるが動かぬ、更迭せよ」と言う者も多かった  
という。佐藤大使は二年半にわたりモスクワに在任し、欧州情勢  
を身近に感得している。彼の提言が受け入れられていれば、人類  
初の原子爆弾被爆も避けられたであろう。残念だ。

早期終戦を考え行動したのは佐藤尚武だけではなかった。東郷  
茂徳外相は一九四一年一月、日米交渉で米国務長官ハルが提示  
したアメリカ側最終提案(日本軍の中国、インドネシアからの完全  
撤退、中華民国国民政府以外の政権否認などを主張したもの)を受理  
した。近代戦は五、六年も存続不可能とみていたが、内外情勢上  
開戦に同意するに到ったときから早期終戦を考えていた。東郷外  
相と東条首相の対立は、開戦まもなく昭和十七年、「大東亜省新

設」をめぐるって始まった。氏は東条内閣更迭を図ろうとしたが、  
宮中で「政変」を憂慮していると知って、志をひるがえし、外相  
を辞任した(一九四二年九月一日)。東条内閣は一九四四年七月一  
七日まで。後、小磯、米内に組閣の天命。二二日。七月にサイパ  
ン全滅、インパール作戦中止、グアム、テニアンに米上陸。一九  
四五年四月五日ソ連日ソ中立条約不延長通告。七日鈴木貫太郎海  
軍大将内閣成立。東郷外相入閣。いずれも終戦を考えての組閣で  
あったようだ。東郷外相も和平派ではあったが、内府經由天皇の  
内意を受け、ひたすらソ連による和平戦略に徹したもようである。  
外に終戦工作に心を砕いた者に鈴木文史朗、在瑞西藤村海軍武  
官、加瀬公使、北村孝治朗、吉村侃のアレン・ダレスを通しての  
和平工作(これに前駐独大使館付武官陸軍中将岡本清豪も加担した)  
など、劇的といつていい動きをした人もいた。いずれも欧州情勢  
の成りゆきを見た人ばかりであった。シベリアンコントロールが  
いかに重要か、これはよい例である。今日の日本の政治の行方の  
危なっかしさが、先に羅列した日曆に重なるて見える。民意不在。  
国会が機能していないこと。先行する「閣議決定」。米国しか見  
ていない。まるで「内府」制度である。

ポツダム宣言が七月二六日発表されたにもかかわらず、政府も  
天皇も一途にソ連の回答を鶴の首を伸ばす如く北へ向けていた。  
米ラジオは、「六日廣島に投下した原子爆弾は戦争に革命的な変  
化を与えるものだ。日本が降伏に応じない限り、更に外の場所にも  
投下する」と伝えた。東郷外相は原子爆弾使用について米側に  
抗議する必要ありと考え、陸軍の方と連絡。陸軍はドイツで原子  
爆弾の完成近しとの報告(スウェーデン駐在陸軍武官から)を受け

ていた（昭和十八年ごろ）。が大戦中には完成しないだろうと考  
える原子物理学者らの意見を信じていた。七月十六日、従ってア  
メリカがニュー・メキシコで威力強大な新兵器の実験を行ったと  
の報道を得ていたが、それが原子爆弾であるとは陸軍のだけひと  
り想像しなかった。

六日午後遅く、少数機による爆弾であつたにもかかわらず広島  
全市は火の海に化したとの報告が大本営に到着。

八月七日、大本営は調査団を広島に派遣、八日夕広島に到着。  
結果一、特殊爆弾が使われたこと、二、身体を被覆していれば火  
傷は防ぎうることなどの報告を九日に大本営あて打電した。広島  
の第二総軍は一、白色の着物をきていた者は火傷の程度が軽かつ  
たこと、二、防空壕に入っていた者も火傷の程度が軽かつたこと、  
三、火災の多かつたのは朝食準備の最中をねらわれたからである  
等と報告。

米戦略空軍は八月九日、第二の爆弾を長崎に投下した。陸軍統  
帥部は八月一〇日ごろ、全軍に対し状況を報告すると共に、「こ  
の種爆弾は恐るべきものでなく、我が方に対策がある」ことを明  
らかにした。陸軍統帥部としては、原子爆弾の出現によつて「本  
土決戦」が成り立つのかどうかを内心非常に心配したが、不成立  
論を堂々と強調するものはいなかつた。

一方政府の方では、七日、この問題で関係閣僚会議が開かれ、  
東郷外相は原爆投下云々のアメリカ放送を詳細に報告。陸軍は、  
米側は原子爆弾といっているが、そうではなく、非常に強力な普  
通爆弾のようだと返答してきた。陸軍統帥部は、ドイツからの情  
報を得て以来ウラニウムの兵器化に関心をもち、且つ研究は進め

ていた。その自信が事態を軽視したのであるうか。

一九三九年八月二日、アインシュタイン博士はルーズベルト大  
統領に核兵器開発の危険な結果を手紙で報告していた。ルーズベ  
ルトが核爆弾に目を向けたのは一九四一年六月であつた。以来膨  
大な資金と科学者を集めて本格的に原子爆弾開発に力を結集した  
のだ。

日本の原子爆弾研究に關係して次の文を付け加える。朝日晝著  
『松本竣介』（画家）という本に次の文章があつた。

“昭和二十年の四月十三日、東京は文字通り厄日の金曜日であ  
つた。夜半一時四四分警戒警報が発令され、（中略）B29一六〇  
機による焼夷弾爆撃が東京中心部に火の雨を降らせている。爆撃  
は三時間にわたり、大宮御所、赤坂離宮の一部は炎上（中略）こ  
の夜の空襲で、東京小石川にあつた理化学研究所の建物の大半を  
消失するが、日本における原子爆弾研究の城、四十九号館のどす  
黒い建物だけは、駆けつけた朝永振一郎研究員の前に奇蹟的に取  
り残されまだ暗闇に突立っていた。しかし、次の瞬間、不発弾で  
も残っていたのか、突然猛火を空に吹き上げて、研究書類も救出  
されぬまま烈火の中に崩れ落ちたのだ。”陸軍に自信をもたせて  
いたのは、この研究所のことだろうか。

東郷外相は八日鈴木首相と打合せ参内し詳細を奏上。「早急に  
ポツダム宣言を受諾の外なし」となり、天皇もその旨首相に伝え  
よと言つた。東郷外相は早速右の思召を木戸内府ならびに鈴木首  
相に伝え、首相に至急構成員会議を召集せられたしと申し入れた。  
首相も納得したが、その日には構成員中に都合つかぬ者あり、会  
議は翌九日に開かれることになつた。翌九日朝、ソ連の参戦を見、

急遽構成員会議が開催されている最中、更に第二の原子爆弾が長崎に投下された。

九日には、原爆であることが大体判明しはじめたが、原子爆弾発表問題は、もみにもまれ、遂に戦争が終わるまで国民にははっきり知らされないままとなった。

最後に——忘れられない兵士のこと。戦争が終った年は、大雨や台風、曇天が多かった。どしやぶりの夜、私の家の浅い軒下に佇む影があった。復員兵だとわかる服装だった。じつと雨を避けようように。父親が出て、中に入るように勧めた。ことばもなくただ礼をして入ってきた。戦争が終つてからの方がいつそう食べ物に困つていたので、夕食も出さなかつたが、兵隊さんは恐縮して板張りの間に休んだ。その次の日も雨だった。父親が、もう一日待つたら上がるだろうと言ひ、二日目の夜も泊まることになった。母親が何とか工面して食べ物を少々差出した。終始ことば少なで、どこで戦つてきたのかもわからなかつたが、三日目家を出る時に、深々と頭を下げて、毛布を一枚、お礼ですと差出して出ていった。この人は天草に帰つたのだから、天草の人だろうとは思つたが、どこへ帰るのかと聞くことも憚られるほど暗い人だった。お礼の毛布のミシン目に虱の卵がびっしり付着していた。

## 注

- 1 赤子―天皇を親に見立てて使つた言葉。人民の総称。
- 2 勅令―明治憲法下帝国議会の協賛を経ず、天皇の大権によつて発せられた命令。

- 3 内府（内大臣）一八八五年（明治一八）内閣制度創設の時、宮中に設けられた重職。天皇の側近に奉仕して皇室・国家の事務について常侍輔弼の任に当り、天皇の印・国の印を保管、詔書、勅書その他内廷の文書及び請願に関する事務をつかさどつた。一九四五年廃止。
- 4 特旨―特別のおぼしめし。
- 5 阿波丸―連合国側から安全を保障されていた救恤品輸送船。一九四五年四月一日、台湾海峡で米潜水艦に撃沈され、二〇〇〇人以上が死亡した。

- 6 ミヨウヒン―一種の政治ブローカー。小磯首相がミヨウヒンを通じて中国との和平工作をしようとして、天皇の信頼をも失い退陣。
- 7 内務省―警察・地方行政選挙その他の内務（土木・衛生・地方行政などに関する職務）を管轄した中央官庁。
- 8 日本政治会南総裁―陸軍士官学校及び大学卒。日露戦騎兵隊長。第二次若槻内閣陸相。一九三四年関東軍司令官。一九三六―四二年朝鮮総督。一九四五年戦犯（七一歳）。

## 参考資料

- 1 『佐藤尚武の面目』栗原健・海野芳郎・馬場明共著、一九八一年八月一日、第一刷、原書房（鹿児島県立図書館所蔵）
- 2 『松本竣介』朝日晷著、初版、昭和二年三月一〇日、日動出版部
- 3 『太平洋戦争陸戦概史』林三郎著、昭和二年三月五日、第一刷、同四七年二月二日第二四刷、岩波新書
- 4 『朝日クロニクル』朝日新聞社

- 5 『チヨプスイーシングガボールの日本兵たち』 絵・劉抗、 訳／解  
説・中原道子（めぐみん）
- 6 『これが沖繩戦だ』 大田昌秀著、 昭和五六年二月二〇日、二〇刷、

- 琉球新報社
- 7 『一億人の昭和史』 4空襲・敗戦・引揚、 一九七五年九月、毎日  
新聞社